

特 259

582

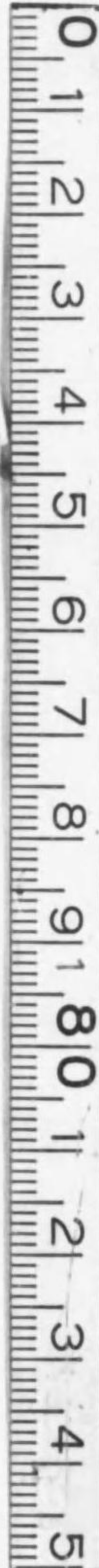
讚岐國直島

崇德上皇御遺蹟調查參考略記

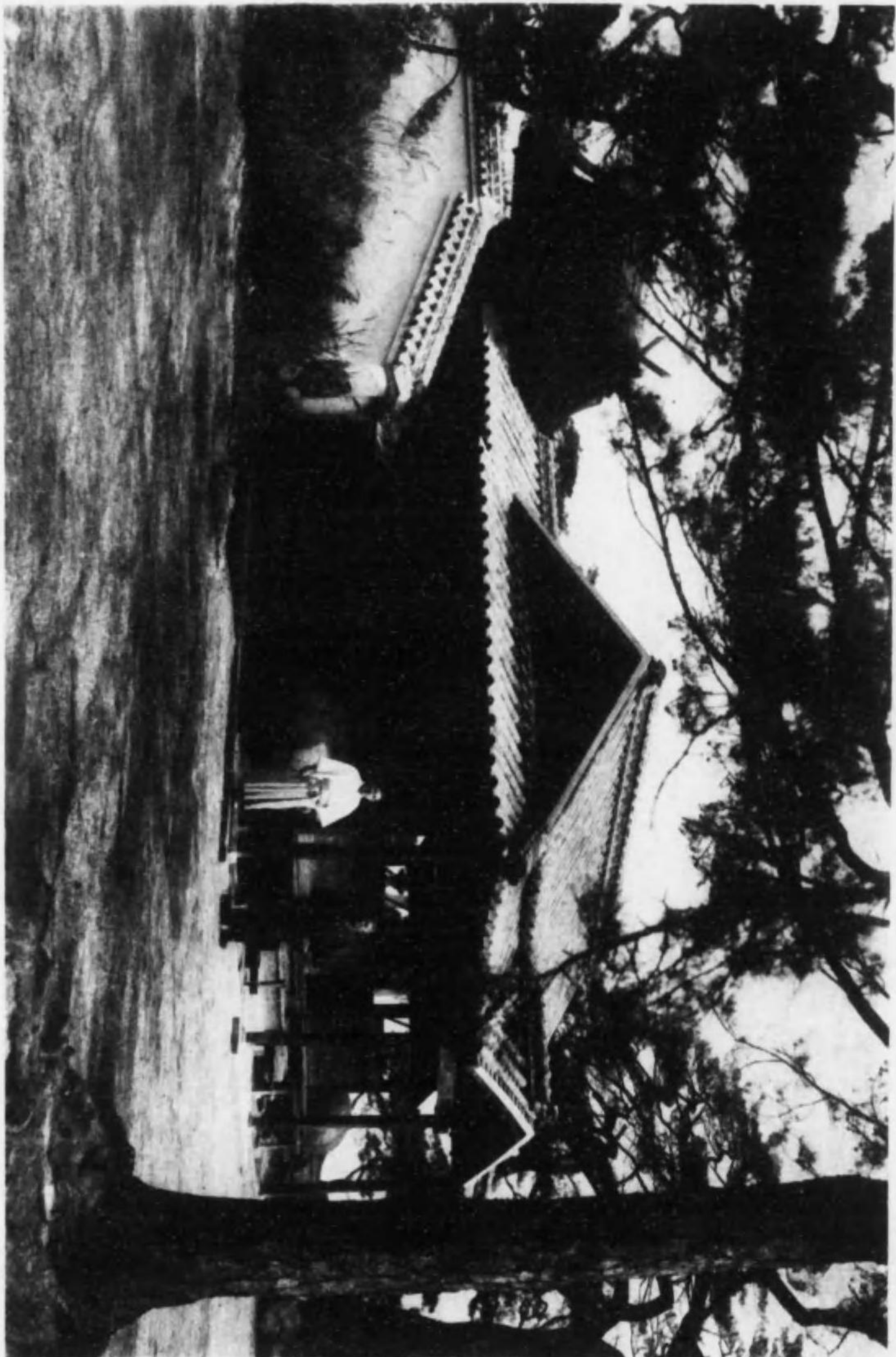
皇紀二千六百年記念

崇德上皇御遺蹟顯彰會

始



特 59
582



崇德天皇神社（無格社）

直島



目次

物語に著はれた崇徳上皇の直島御配流……………一

平家物語……………一

源平盛衰記……………一

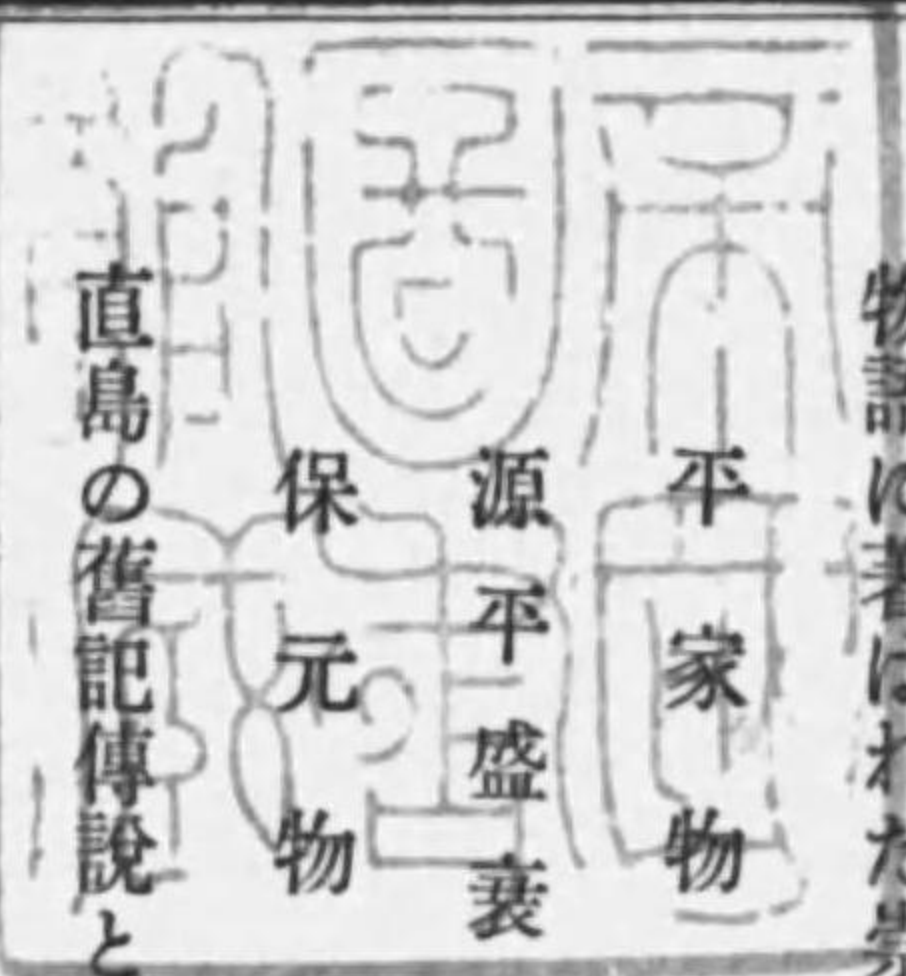
保元物語……………一

直島の舊記傳説と御遺蹟……………六

舊記……………六

御舊蹟……………七

神社並に舊蹟調査の爲來島者……………九



崇徳院
なほ島

蓮如上人

物語に著はれた崇徳上皇の直島御配流

平家物語(長門本)卷第四

新院讃州配流の後、さのきの院と申けるを、廿九日追號あり、崇徳院と申、去保元元年七月に當國にうつされ給ひて、はじめはなほ島にましましけるが、後にはさぬきの國の一在應野太夫たかとをが堂に渡らせ給ひけるが、後にはつゞみの岡に御所を立てぞわたらせ給ひける、さぬきの院の主上にて渡らせ給ひける時、小河の侍從隆憲と申けるが、院かくならせ給ひければ、後の御門に仕へむ事も物うかるべしとて、もとどり切りて、今は蓮如上人とぞ申ける、山林に交はりて一向まことの道に入りたりけるほどに、院の御跡を尋參らせて、さんしうへまいり、なほ島といふ所に、ついがき高くして惣門を隔て、内には屋一字をつくりて、門に武士をそへて、外より鑰をさし、供御をまいるより外はたやすく門を

開くことなし、かゝりければ、蓮如参りたりけれども、見参に入事もせず、我かゝる遁世の身なり、何かくるしかるべき、一目見参らせて罷上り候ばや、まげて御許を蒙らんと、守護の武士になく、申けれども、ゆるされず、力及ばず此蓮如俗にてありし時、笛を面白く吹ける間、笈の中に笛を入れて持たりけるを取出して、参りたりとだにも知らせ参らせんとて、一町の築垣を終夜笛を吹てぞまはりける、是をきこしめして、年ごろ是に笛吹くものこそなかりつれ、いかなる者の吹やらん、小河侍從隆憲が吹し笛の音に、少しも違はぬものかなと思し召して、今更戀しくならせ給ひて、惣門近く出御あて、きこしめせば、姿は御らんぜねどもたかのりが聲にて、今生の思ひ出、後生の訴に、今一度をがみ参らせんとなく、申けり、院是を聞召して、かなしみの御涙せきあへず蓮如なく、かくぞ申ける、

身を捨て、木の丸殿に入ながら

君にしられて歸るかなしさ

院是を聞召して、さればこそと思召されければ、人にもはばかり給はず、御聲をあげてなかせ給ふ、やや久しくあて、何とも御詞を出さずかたみにせよと思召されけん、御一筆を書きすさみて、門より外へなげ出し給ひぬ、蓮如是を給て、月の光に見ければ、

あさくらやたゞいたづらに返すにも

つりするあまの音をのみぞなく

蓮如此御一筆をむねにあて、かほにあて、たゞこがる、事限りなし、心のゆくほどなきあきて、あな口をしや、生をへだて、候らんもかくこそ候らめ、六道の巷にこそおもはしきもの、聲ばかりは聞候なれと、目に見る事はなかなれ、その定に多くの國々を隔て、浪路はるかにわけ参りて候に、わづかに壁を隔て、見参に入候はぬ事こそ口惜しく候へ、たゞし是に付ても今生はたゞうき所と思召し、此度生死をはなれて極樂浄土へ参らせ給へ、蓮如も此身になり候へば、たゞ極樂浄土の戀しさに、うき世をいとひて候なり、君もはかなきかりのやどに都へ歸らせ給

ひても、何かはせさせ給ふべき、たゞ急ぎ浄土へ参らんと思召さるべしと、蓮如も必來世にては参りあひ候べしとて、笈を肩にかけて、鳥をなく、
罷出ぬ、蓮如が申ける事肝に思召されて、今生のことを思召し捨て、後生ほだいのために、五部の大乘經を、御筆に三年の間書集めさせ給ひて、御室へ申させ給ひけるは、墨付に五部の大乘經を三年が間に書き集めて候を、かいかねの聲せぬ遠國に捨て置き奉らんことうたてしく覺え候、御經ばかり都近き八幡邊に置き奉候は、やと申させ給ひける、御書のおくに

はま千鳥跡は都に通へども

身は松山にねをのみぞなく

御室より此由關白殿へ申させ給ふ、關白殿内裏へ申させ給ひければ、小納言入道信西が申けるは、いかでかさる事候べき、叡聞に及ぶべからずと、大に諫め奉りければ、御經を都へ入参らす事叶ふべからずと仰下されけり、新院此事聞召して、心うかりけるためしかな(中畧)

西行

去仁安三年の冬の頃、佐殿兵衛入道西行、後には大法房圓位と改名しける、國々修行しけるに、讃岐の松山といふ所にて、是は新院の渡らせ給ひし所ぞかしと思ひ出奉て参りたりけれども、そのあとも見えず、松の葉に雪ふりかゝりつゝ、道を埋みて人の通ひたる跡もなし、なほ鳥より志度といふ所にうつらせ給ひて、年久なりにければ、ことわり也、

よしさらば道をばうづめつもる雪

さなくば人の通ふべきかは

とうち詠じて、白峯といふ所の御はか所に尋参りたりけるに、怪しの國人の墓のやうにて草ふかくしげりたり、いかなる御宿業にて渡らせ給ふやらんと、心うく覺えて、昔は十善のあるじとて、九重の内につはれてあかし暮し給ひしに、今は三途の關にまどひて、八重の葎の下にふしまし、けんとかなしからずといふ事なし、翠帳紅圍の中には、三千の主と仰がれ、龍樓鳳闕の中には、二八の主とかしづかれ給ふ、辨才世にかまびすし、威徳朝にふるひ給ひしに、徒に名ばかりとまらるならひなれ

ば、宮もわらやもはてしなし、世の中はとてまかくても有ぬべきかなと、思ひつゞけてつらくと、御墓所のまへに候へども、法華三まいつとむる禪侶もなく、念佛三まい勤むる僧も一人もなかりければ、
なほ、島の波にゆられて行く舟の

行衛も知らずなりにける哉

とよみたりければ、御墓震動して、俄に黒雲うづ巻、眞黒さまになりけり、斜ならず御憤り深かりけるを、行衛もしらずと讀みたりけるを、御とがめありて、あしく讀奉りけるにやとて、ひがさをのけ、袖かきつくろひて、

よしや君昔の玉のゆかとても

かゝらん後は何にかはせん

と讀みたりければ、御はか元の如くしづまらせ給ふ、云々

源平盛衰記八

讃岐院の
事

五部大乘
經

新院讃岐配流の後は讃岐院と申けるを廿六日(治承元年七月)に御追號有て崇徳院とぞ申ける去る保元々年七月に當國に遷され御座て始は眞島に渡らせ給けるか後には在應一の廳官野太夫高遠か堂に入せ給けるを鼓岡に御所を立て居奉御歎の積にや御惱の事有ければ關白殿へ能様に申させ給へと仰有けれども世に恐させ給つゝ御披露も無ければ思召切らせ給て三年の間に五部大乘經をあそはし集て具鐘の音もせぬ遠國に捨置進らせん事心憂く覺え侍るに御經はかり都近き八幡鳥羽邊迄入まゐらせはやと御室へ申させ給けり

保元物語

去程に今日(廿二日)藏人左少辨資長綸言を奉て仁和寺へ參り明日廿三日新院を讃岐國へ遷し奉るへき由を奏聞す(中畧)讃岐に著せ給しかとも國司いまた御所を造出されされは當國の在應散位高季と言者の造

りたる一字の堂松山と言所に在にそ入進らせけるされは事に觸て都を戀敷思召ければ角なん

濱千鳥跡は都に通へとも

身は松山に音をのみそ啼

(中畧)去程に新院は八月十日御下著の由國より御請文到來す此程は松山に御座ありけるか國司既に直島と言所に御所を造出されければそれに遷らせおはします四方の築垣つき只口一つ開て日に三度の供御進らする外は事問奉る人もなし

(京師本杉原本鎌倉本半井本並云)

御所は國司の沙汰として當國四度郡直島と云所に造り陸路より押渡る事二時許田畑もなければ土民の住家もなし(半井本住人)實にけうと(も少し云々)き所也四分一より遙に狭く築地を築中に屋一つ門一つを建外より鎖をさし供御進らする外は人の出入有へからず仰出さるゝ事あらは守護の兵士承て目代に披露せよと仰下さる云々

(京師本杉原本鎌倉本並云)

鳥羽院の北面紀伊の守則通と云者道心を發し出家遁世して蓮譽(鎌倉本作蓮如)と名乗ひしりありき在俗の時は陪從にて内侍所の御神樂に參けるかそれかあらぬかの程にて御目に懸るまてはなかりけれども新院の御事哀に御床しく覺讚岐に尋參御所の體を見れば目もあてられぬ淺ましけなる御有様也如何もして御所中へ入はやと窺けれ共門守護の兵士嚴しければ御所のあたりを立まひくしけれとも哀とたにも云人なし夜に入笛吹朗詠して泣々心を慰けり夜更人定まりて後御所の中より人立出たり蓮譽御前へ參るへきならねは板に一首の歌を書是を天聽に達して給はらんと云ければ此人奏しける程に新院叙覽あり

朝倉や木の丸殿に入なから

君にしられて歸る悲しさ

院も哀に思召御前近く召都の事をも聞召昔の床しさを尋はやと思

召けれともそれもさすかにてたゝ御返事はかりありける
朝倉やたゝいたつらにかへすにも

釣する海士の音をのみそなく

蓮譽是を賜て笈の底に納泣々都へ上りけり

百人一首一夕話 七

かくて保元々々年七月廿一日藏人左少辨資長綸言をうけたまはりて仁和寺へまかり明廿三日新院を讃岐の國へ遷し奉るへきよしを奏聞す(中畧)ほとなく讃岐につかせたまひしかと國司いまた御所を造り出さゝりければ當國の在應散位高季かつくりたる松山の一字の堂に入れまゐらせければわつかに宮女三人みやつかへしけるさて程なく國司眞島といふ所に御所を作りければそれにうつらせをはしましけるか又志度の鼓岡といふ處にすませたまへり云々

直島の舊記傳説と御遺蹟

舊記(神職三宅家藏)…記録延享頃か

(上略)古へ保元元年文月の頃かとよ崇徳の新院夜軍に討負給ひ葉月十日當國に御遷幸なる在應散位野太夫高季か造たる松山に一字の堂ありまづこれに遷し奉る國司當島六人の長の者どもと談らひ在所の並の岡に御所を築き既に配し奉る其後實號をも讃岐院と稱し奉るとかや讃岐院御宿りをしめ給ふ所なる故泊ヶ浦とは申すとなんいでや其頃四方の津比垣厳しく唯口一つにして三度の供御を進らする外こと問奉る人もなし秋も漸く更行まゝに松を吟する嵐叢によはる虫の音もいと御心細く夜の雁の遙に海を過るも古郷に言傳せまほしく思召曉の鶴洲崎に騒くは御心をくだく種となん震襟隠かならすと(中畧)青々たる深谷に僅に皇居の築地の石残りたる有様苔なめらかにものさびたり遠く慮も恐なから實とにいたゝしき御事とも拙き袂を潤ほ

すはかりなり(中畧)崇徳天皇當島に三年皇居あつて志戸へ御遷幸のみ
きり島の諸人御名残惜み奉り陸路をひろひ此浦まで見送り奉る爰に
て勅して宣給はく島人よ岩木ならねは聞も分なん丸いとも恐き天
照大神の神裔を續き天か下に君とし臨み猶仙洞の娛樂少なからず
しもあらずかしされどもだしがたき事のあるは既に合戦に及ぬ
る時丸か軍弱にもあらずかし唯聖運の足らざる處哀むにも猶余あり
終に敗軍まぢしにして野の末山の奥と徘徊ひ其上心なき武士に嚴
しく警固せられ流離ひの身と成て此島に悲歎の眉を顰むこと三年に
なんぬ日六合を照し給ふと雖も丸か身は日蔭の草と思を凋む其艱勞
の泪日夜の辨別なしされと日を追ひ月を重てすこし心も慰むといへ
とけふ亦志戸とやらん木の丸殿とやらん聞もうるさき泪の種其たつ
きなき心根を推量して諸共に哀と思ひくれよかし若も配所土となら
はなき靈祭行へよ忘れましきな忘貝これを丸か記念かたみと思ひ出し末の
世までも語り傳へて懇に祠ひ祭れよさもあらは行末なく守るへし

さてしもいつまでか名残を惜むへきとうゝ家居に歸るへしと宣せ
あへさせ給はず御船の内に打伏し給ひ御泪せきあへさせ給はずとな
ん島の諸人一音に深く泪に伏沈み恐なからも遙に見送り奉るまた御
跡したひ奉るもありとなん則ち此浦にて家居にまかり歸るへしと恐
なからもお暇下し置れし所なるゆへ暇浦とは名付しとかや又山の惣
名も暇山と云也(中畧)六人の長の者とも(中畧)恩頼を忘れかね奉り小社
を儲てかけまくも畏き神靈此地に止まり給へと拜賀す然して長き齡
を経て寛文中當島領主高原内記殿今の社を造營ある也云々

舊記(神職三宅家藏)

保元の頃まで其民僅に十戸許り専ら稼穡を勤め旁々釣漁業をなす干
時崇徳上皇讃州に配流させ給ふて先此島に遷り座す御船を初て泊
し地を泊の浦と名つく依て權りて桃山に宮舎を造りて止り仕せ給ふ
事三年後其所を名つけて皇居蹟と云上皇干時震襟慰めんとおほし
海汀にさまよひ自ら拾せ玉ふ貝を戀忘貝と名つく今に其所に存す異

邦曾てあらず奇種と言つへし且 上皇恩願の侍臣追來りて仕へ奉らんとすれとも配流の御身なれば迎左右に侍る事不能依て島の一方に潜居して 上皇の安否を伺ひ奉る其地を號して大納言中納言と云哀しひ哉 上皇は九重之鳳闕を離れて玉體を萬里の波濤に惱しめ給ふ朝夕の御餉とても龜糲にして只餓させ給はぬのみ依て島の者共誠に憐み奉り海の鮮き野の甘き是を得ることに先來り獻りて朝夕仕奉る事謹て懈りなし云々

御 舊 蹟

崇徳天皇神社(無格社)

祭祀年月は 永萬元年八月廿六日 島民等上皇の恩頼を敬ひ奉りて小社を儲けて神靈を祀る。後領主高原内記殿社殿を造營なす。島民の崇敬ことにあつし。

泊ヶ浦御宮跡

上皇の御船をこゝに泊めさせ給ふによりてこの浦を泊ヶ浦と言ふ。

御宮跡はこの浦の上にある、古石苔むして神さびたり。
王積の浦

上皇この浦より御船に召させ給ひて讃岐に渡らせ給ふと傳ふ。
辨才天社

御宮跡より眼下に辨天島を望む。眺望絶佳にして、舊記に「上皇風光を賞てさせ給ひて辨才天を祀る」とあり。

硯の水、御用水
御こもり

小祠あり、上皇こゝにて五部大乘經を書き給ふと云ひ、亦侍女を葬る處とも傳ふ。明治初年まで老木ありてその枝の末は必ず東に向ひて茂りたることを村人等言ひ傳へ、今も恐れ敬ひて手を觸るゝ者もなし。

經納山

上皇五部大乘經を此山に納められしならむと傳ふ。

御子持

侍女懷妊して此處に住まへりと傳ふ。宮跡詳ならず。

姫宮の森

侍女の産み給ひし姫宮を祀ると傳ふ小祠あり。

琴彈の濱

白砂青松まことに美しき濱なり、上皇此濱にて琴を彈せ給ひ亦貝を拾はせ給ひて御慰給ひし所なりと、故に此名あり。亦その貝の名を忘れ貝と名づく、純白なるものは加茂川の水にて洗へば、左の御詠出し由、古老言ひ傳ふ。

崇徳上皇御詠

松山や松の裏風吹きこして

しのびて拾ふ戀忘貝

暇浦

上皇の御船をしたひ磯邊を傳ひて島人等此處に至る。此浦にてお

納言様

暇下し置れし所なる故暇浦と言ひ亦山の名を暇山と言ふ。

公卿都より來りこゝに潜居して上皇の安否を伺ひ奉ると傳ふ。
京の上蘆島

都より來れる侍女此島に住めるによりて此名ありと傳ふ。
其他舊蹟と傳ふる所多し。

神社舊蹟調査の爲來島者

戸田大和守 慶應年間白峰神宮祭祀に付御來島、天皇神社の御神體改めの爲め參拜ありたり。

勅使中院大納言三條西左少將 崇徳天皇御神靈を松山より京都へ御奉遷の途(明治元年八月廿八日)直島沖に至りて一天俄に曇り暴風となれり仍て御船を直島に御寄泊なし給ひ此島に 崇徳天皇の御由緒ある事を聞き給ひて直ちに 天皇神社に御參拜ありて翌二十九

日御發船海上無事に京都に御奉遷あらせらる。
直島に御寄泊なりしは全く 崇徳天皇の御導き給ひしならんと勅
使御物語ありし由。

柵橋絢子刀自 大正四年史蹟を尋ねて御來島ありたり。
宮内省圖書寮久保徳三博士 史蹟調査の爲御來島のみぎり

終古分明遺蹟存 龍舟漂蕩定銷魂
愁聞海口潮聲咽 絶島蜃煙斜照昏

大正十二年癸亥晚秋銜官命至直島巡覽崇皇遺蹟其夜宿三宅氏仍留一絶以當他日之記念

天隨初學

琴の音に通ひしうらみ忘れ貝

拾ひし昔おもほゆる哉

天隨

大君の御舟を此に泊り浦

秋風さむく蘆の花散る

天隨

歌人若山牧水 大正十年此島に御遺蹟を尋ねて

ことひきの濱の松風静けしと

きけば冲邊に雨のふるなり

牧水

曳船の一つらならひゆくさまの

しつけき沖のけふの雨かな

牧水

其他御遺蹟に關する舊記

故新傳、直島順覽圖繪(三宅重教氏藏
年代慶應頃か)等數多あれど之が刊行は他日にゆ
づる。

昭和十五年十一月十一日印刷
昭和十五年十一月十七日發行

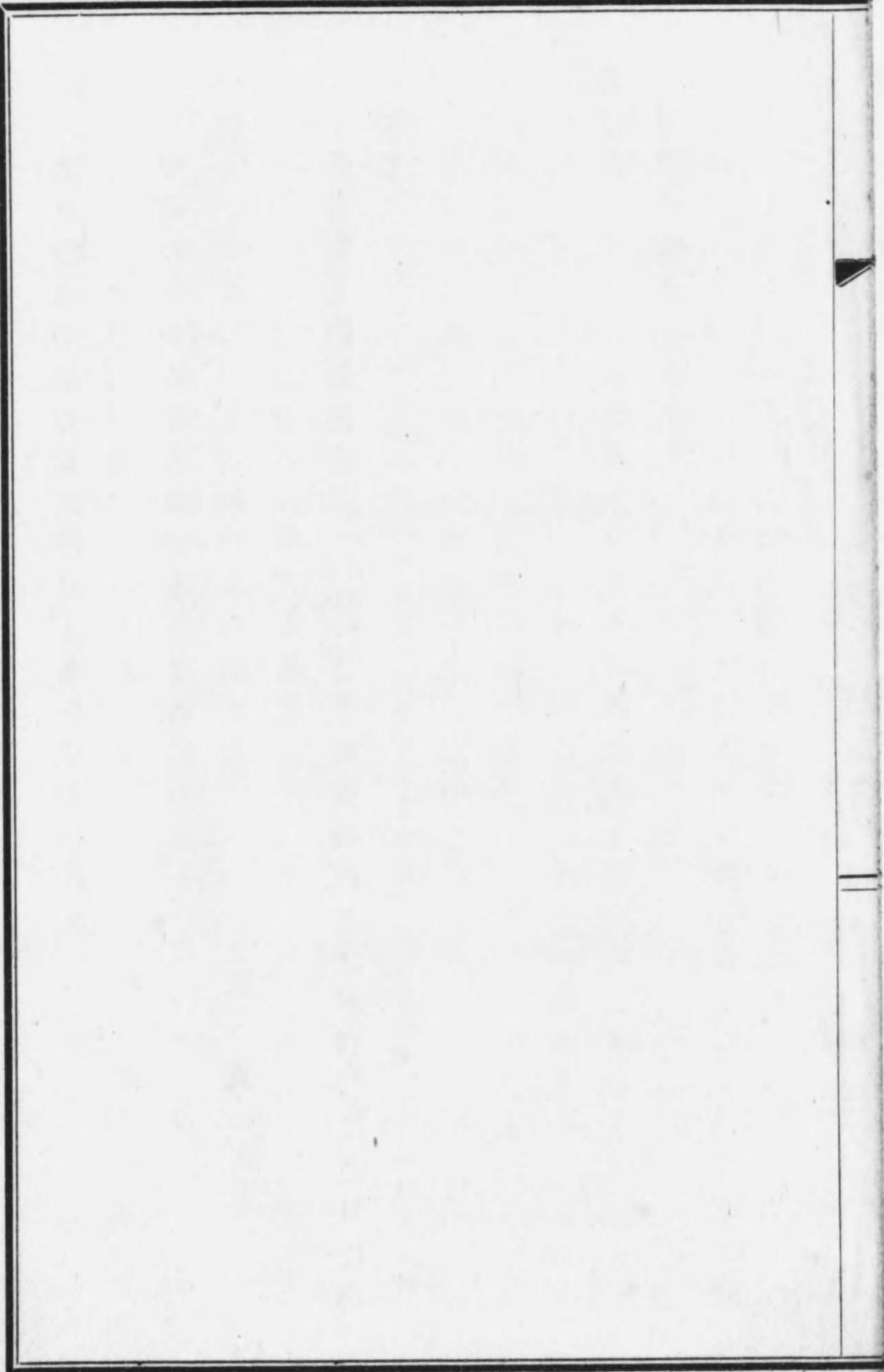
編輯
行人 三宅親連

印刷人 村本万龜男

印刷所 岡山市東中山下一二三番地
研精堂印刷所

香川縣香川郡直島村八五〇
直島村役場内

發行所 崇德上皇御遺蹟顯彰會



終